

基本展示室のヤジリ関係資料

あいち朝日遺跡ミュージアム企画展「ヤジリの考古学」に御来場いただきありがとうございます。
ミュージアムの基本展示室の模型、映像、展示品にも、ヤジリ（鎌）や弓矢に関する資料を展示しています。ぜひ企画展と合わせて御覧下さい。



12-1 弓矢による狩り
(クローズアップ模型「山・森での活動」)



12-2 弓矢を用いた戦い
(クローズアップ模型「防御施設と戦い」)



12-3 弓矢を用いた戦い
(クローズアップ模型「防御施設と戦い」)



12-4 ◎弭形角製品
朝日遺跡(弥生/本館蔵)



12-5 ◎石鎌・木鎌・骨鎌 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



12-7 ◎彩色弓 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



12-6 ◎銅鎌 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



参考文献

- 愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1991『朝日遺跡Ⅰ』、1993『朝日遺跡Ⅳ』、1995『鳥田陣屋遺跡』、2002『清洲城下町遺跡Ⅶ』、2003『八王子遺跡』、2008『惣作鐘場遺跡Ⅱ』、2014『松崎遺跡Ⅱ・上浜田遺跡』、2015『石座神社遺跡』、2015『吉竹遺跡』、2020『川向東貝津遺跡』
- 佐原真 1975『かつて戦争があった-石鎌の変質-』『古代学研究』第78号
- 白石浩之 1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
- 宮腰健司・山崎健・大河内隆之・原田幹 2011『朝日遺跡から出土した石鎌の刺さったシカ腰椎について』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』12

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL: 052-409-1467 ■ 駐車場 15 台

企画展

「ヤジリの考古学」

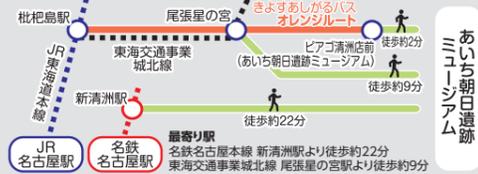
編集・発行

あいち朝日遺跡ミュージアム

2024(令和6)年4月27日発行



AICHI ASAHI
SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



名古屋第二環状自動車道「清洲東IC」から約1分
施設駐車場の数には限りがあります。
駐車場の満車の場合、清洲公園駐車場に駐車できます(午後5時45分まで)。

ヤジリの考古学

～あいち朝日遺跡ミュージアム企画展～



AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

今回の企画展では、狩りや戦いに用いられてきた弓矢に着目し、矢の先端に付けられた「ヤジリ(鏃)」を取り上げます。朝日遺跡からは1000点を超える石鏃(石のヤジリ)が出土しています。

手の平に乗る小さな石器には、細かな加工が施され、その端正なデザインには土器とは違った魅力があります。ヤジリ(鏃)は石だけでなく、木、骨角、金属など様々な材質で作られてきました。また、朝日遺跡では矢を射出する弓も出土しています。

本企画展では、本館及び愛知県埋蔵文化財調査センター(弥富市)が所蔵する縄文時代から戦国時代までの出土品から、主なヤジリ(鏃)に関する資料を展示し、その変遷、技術を紹介します。

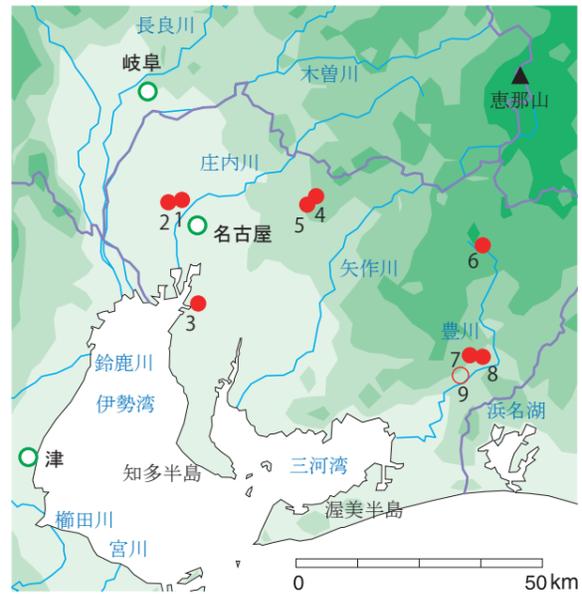
また、ヤジリ(鏃)や弓について知るための参考資料として、南山大学の調査団がパプアニューギニアで収集した弓矢に関する民族資料も展示します。

目次

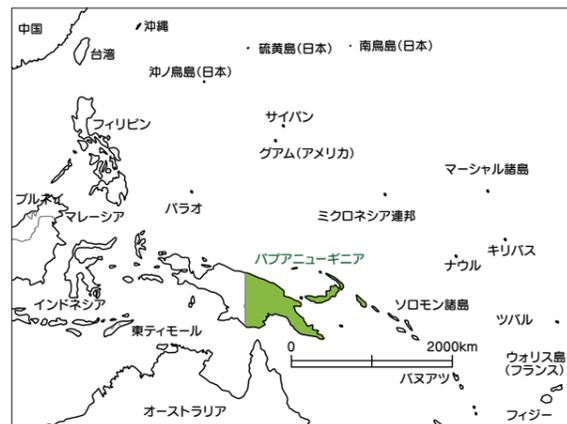
はじめに	2
ヤジリの出現	3
弥生時代のヤジリ	4
様々な材質のヤジリ	6
シカの骨に刺さったヤジリ	8
弓とゆはず	9
古墳時代以降のヤジリ	10
弓矢から鉄砲へ	10
民族資料の弓矢～パプアニューギニア	11
基本展示室のヤジリ関連資料	12
<コラム>	
石鏃を模した骨鏃	6
キリに転用されたヤジリ	7
人を射ったヤジリか?	9

凡例

- 本書は2024年4月27日から6月23日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「ヤジリの考古学」の展示パンフレットである。
- 掲載資料には、本企画展で展示されていないものもある。
- 掲載資料のうち重要文化財には「◎」を付している。
- 掲載写真及び図の出典は頁下に記した。
- 参考文献は12頁に記載した。
- 本書の執筆・編集は、原田幹が行った。
- 本展覧会開催にあたり、下記の機関・個人から協力を得た。
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、愛知県埋蔵文化財調査センター、南山大学人類学博物館、井原瑠梨、黒澤浩、城ヶ谷和広、高橋佳子



1.朝日遺跡(清須市・名古屋市西区) 2.清洲城下町遺跡(清須市)
3.松崎遺跡(東海市) 4.八王子遺跡(瀬戸市) 5.惣作・鐘場遺跡(瀬戸市)
6.川向東貝津遺跡(設楽町) 7.石座神社遺跡(新城市)
8.吉竹遺跡(新城市) 9.島田陣屋遺跡(新城市)
2-1 遺跡地図



2-2 パプアニューギニアの位置

ヤジリの出現

ヤジリ(「鏃」あるいは「矢尻」とも表記されます)は、矢の先端に取り付けられ、対象に突き刺さる部分です。矢は弓とセットで用いられます。弓矢は、人間が生み出した飛び道具としては、投槍に次いで歴史のある道具です。石で作られたヤジリは石鏃と呼ばれます。他にも骨角製の骨鏃、木で作られた木鏃、金属で作られた銅鏃、鉄鏃など、さまざまな材質のヤジリ(鏃)が作られてきました。

旧石器時代後期から縄文時代初期には、先端が尖った石器として、木葉形尖頭器(3-2)や有舌尖頭器(3-3)などがみられますが、これらは槍先として用いられたものと考えられています。縄文時代草創期にはより小さな尖頭器である石鏃(3-1)が出現し、やがて木葉形尖頭器や有舌尖頭器に代わって、日本列島に広く普及していきました。これらの石器は、主に動物を対象とした狩猟具として発達しました。縄文時代の初期は、寒冷な気候が温暖化へと向かい森林が発達していった時期です。旧石器時代に棲息していたナウマンゾウやオオツノジカといった大型の哺乳類は絶滅し、森林の発達とともにニホンジカ、イノシシ、キツネ、ノウサギなど中小型の動物が繁殖していきました。これらの動物を対象とした狩猟具として、弓矢が出現、発達していったと考えられています。縄文時代に用いられた石器として、石鏃は最もメジャーな石器となっていきました(4-1)。



3-1 出現期の石鏃 八王子遺跡
(縄文草創期/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



3-2 木葉形尖頭器 川向東貝津遺跡
(縄文草創期/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



3-3 有舌尖頭器 惣作・鐘場遺跡
(縄文草創期/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



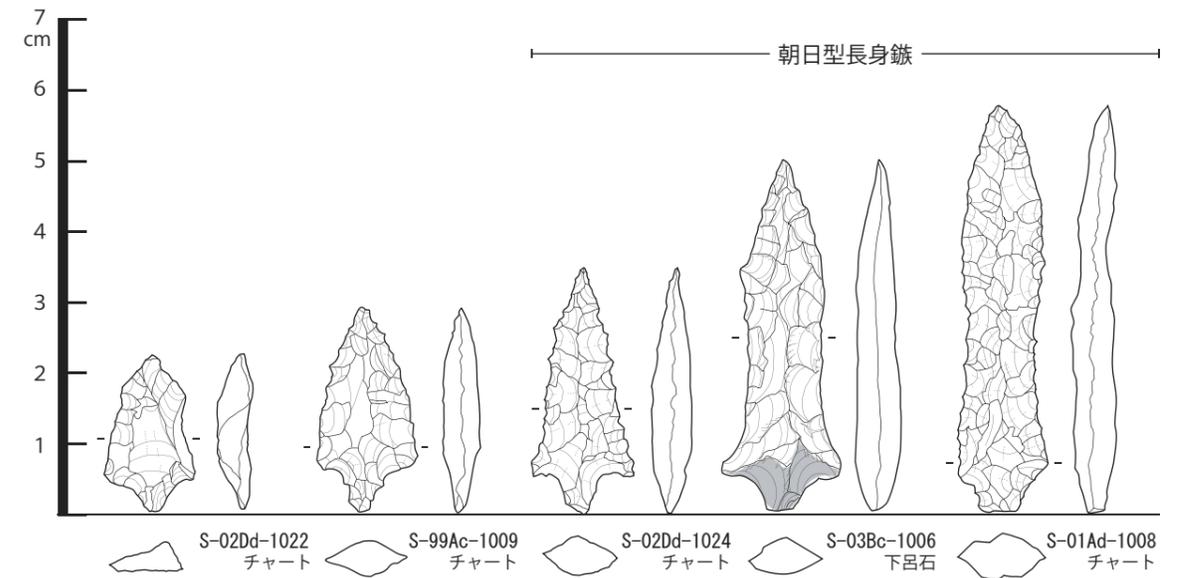
4-1 打製石鏃 八王子遺跡
(縄文/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)

弥生時代のヤジリ

稲作農耕が普及していった弥生時代になっても、ヤジリ(鏃)は主要な道具として使われていました。一方で、弥生時代に石鏃が大型化する傾向が指摘されてきました。

佐原真は、弥生時代中期の近畿地方で石鏃の大型化が進行したことを指摘し、軽く小さな石鏃から長く重い石鏃への変化を、弓矢が狩猟具から戦闘用の武器へと変質していったと説きました。朝日遺跡など愛知県の弥生時代の遺跡でもこの傾向はうかがうことができ、長さ3cmを超える長大な石鏃が見られるようになります(5-1)。朝日遺跡で最大の石鏃は、長さ7cmにも達する大きなものです。

弥生時代にどのような戦いが行われていたのかは不明な点も多くありますが、武器とみられる石器の他、楯などの防具も出土しています。また、朝日遺跡では逆茂木・乱杭等の多重防御施設が発掘されています。あいち朝日遺跡ミュージアムの基本展示室のクローズアップ模型「防御施設と戦い」では、弓矢を主要な武器として戦闘の様子も再現しています。



5-1 朝日遺跡出土石器実測図

東海地方では、先端に段をもち身の平面が五角形を呈する有茎の打製石鏃が作られていました。なかでも、長さが3cmを超える大きなものは、朝日遺跡の名を冠し、「朝日型長身鏃」と呼ばれています。石材は、下呂石、チャートの他、近畿地方のサヌカイトも用いられています(5-2)。



5-2 ©打製石鏃 朝日遺跡 左3点:チャート、中3点:下呂石、右上2点:サヌカイト、右下1点:黒曜石
(弥生/本館蔵)

様々な材質のヤジリ

朝日遺跡では、様々な材質のヤジリ(鏃)が使われていました。石鏃は、先にみた打製石鏃の他に、磨いて作られた磨製石鏃(6-1)もあります。この他、木で作られた木鏃(6-2)、動物の骨や角を素材とする骨鏃(7-1)があり、身の形の違いや茎が長く突出するものなど、石鏃以上に形のバリエーションが豊富です。また、青銅製の銅鏃(7-2)も、金属が使われ始めた弥生時代ならではの資料です。本企画展では、新城市石座神社遺跡の銅鏃(7-3)、同吉竹遺跡の鉄鏃(7-4)を紹介しています。

こうしてみると、弥生時代は最も多様なヤジリ(鏃)が作られていた時代といえるかもしれません。



6-1 ◎磨製石鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



6-2 ◎木鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



7-1 ◎骨鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



7-3 銅鏃 石座神社遺跡
(弥生/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



7-2 ◎銅鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



7-4 鉄鏃 吉竹遺跡
(弥生/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)

コラム 石鏃を模した骨鏃



6-3 ◎骨鏃と打製石鏃
朝日遺跡(弥生/本館蔵)

ヤジリ(鏃)のなかには、材質をこえて、その形を模倣したとみられるものがあります。写真6-3左は朝日遺跡出土の骨鏃ですが、その形は写真6-3右の朝日型長身鏃にそっくりな姿をしています。平面的な形ばかりでなく、先端部から身中程までの外縁に鋸歯状のギザギザが施されているのも、打製石鏃の剝離を意識した加工といえるでしょう。

この他、銅鏃の一部にみられる三稜鏃によく似た形態の木鏃や骨鏃などもあります。

コラム キリに転用されたヤジリ



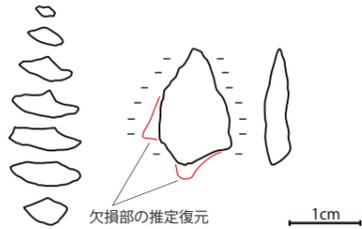
7-5 ◎鏃に転用された打製石鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵) ※◎右3点 7-6 使用痕顕微鏡写真

石鏃のなかには、まれに先端部が磨り減って丸みを帯びているものがあります(7-5)。顕微鏡で拡大すると、回転によって生じた無数の線状の痕跡が確認できます(7-6)。これはヤジリの先端を使って別の作業、例えばキリ(錐)として孔をあける作業などに用いられたことを示しています。穿孔作業には、石錐と呼ばれる別の石器が用いられましたが、その石材は下呂石やチャートなど打製石鏃の石材と共通しており、場合によっては石鏃が石錐に転用されたとみられます。

シカの骨に刺さった石鏃



8-1 ◎シカの骨に刺さった石鏃
朝日遺跡(弥生/本館蔵)



8-2 CT画像から復元した石鏃

弥生時代中期の貝層から出土した、ニホンジカの第6腰椎骨には、チャート製の打製石鏃が刺さっていました(8-1)。

石鏃の大部分は骨の中に貫入しており、全体の形は不明でしたが、X線CT装置で撮影・計測したところ、その全体像を知ることができました(8-2)。復元された石鏃は、現存長18.5mm、幅11.5mmの小型の五角形鏃であること、矢はシカの右斜め前方からほぼ水平に打ち込まれたことがわかりました。また、石鏃の先端部は骨の中で折れており、片方の側縁と茎が欠損していることもわかりました。おそらく矢が刺さった際(及び矢が抜けた際)の衝撃によって破損したとみられます。なお、石鏃は脊椎までは達しておらず、石鏃を覆うように骨増殖が進んでいることから、この矢傷は致命傷とはならず、シカはしばらくの間生きながらえたようです。

この資料は、石鏃が狩りの場で用いられた実際の状況を知る貴重な事例です。



8-3 復元された狩りの様子
(朝日遺跡クローズアップ模型「山・森での活動」)

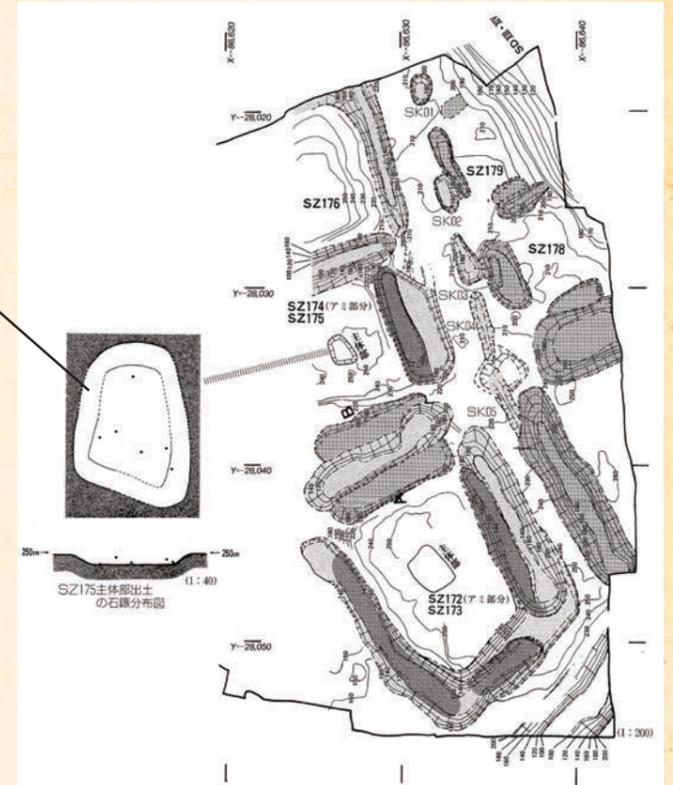
あいち朝日遺跡ミュージアム基本展示室のクローズアップ模型「山・森での活動」には、石鏃が刺さったシカの骨の分析結果から復元した狩りのシーンが再現されています(8-3)。獣道を歩くシカの斜め前、木の陰から弓を構えた狩人の姿があります。狩人の目線から模型をのぞくと、ちょうどシカの姿が見えるので、ぜひ探してみてください。

コラム 人を射ったヤジリか?



9-1 墓坑から出土した石鏃 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)

朝日遺跡の方形周溝墓SZ175の墓坑とみられる土坑から、約10点の石鏃が出土しました(9-1・2)。副葬品として供えられた可能性もありますが、出土位置はバラバラで、先端や身が欠損したものもみられます。人骨が残っていないため確定はできませんが、矢を何本も射込まれた人が埋葬されていたのかもしれない。



9-2 石鏃が出土した方形周溝墓

弓とゆはず

弓は矢を射出する器具です。朝日遺跡から出土している弓には、全長が150cmを超える比較的大型のものと50~80cm短い短弓がみられます(9-3)。材はイヌガヤ、マユミなどの弾力のある材の他、スギやマツなども使われています。弓の両端は、弦をかけるための段などの加工が施されています。また、出土品には鹿角製のゆはず(弭)もみられます(9-4)。



9-4 ◎弭 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



9-3 弓 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



ゆはず部の拡大

古墳時代以降のヤジリ



10-1 鉄鏃 松崎遺跡
(古墳以降/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



10-4 鉄鏃 清洲城下町遺跡
(戦国/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



左 10-2 骨鏃 松崎遺跡
(古墳以降/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)
右 10-3 銅鏃 朝日遺跡
(古墳/本館蔵)

古墳時代以降もヤジリ(鏃)は使われますが、古墳の副葬品などをのぞけば、遺跡からの出土事例はそれほど多くはないでしょう。古墳時代以降のものとして、東海市松崎遺跡で、鉄鏃と骨角製のヤジリが出土しています(10-1・2)。朝日遺跡から出土した銅鏃の一つは、身に十字形の鑄があります(10-3)。弥生時代の包含層から出土したとされますが、その形から古墳時代前期のものと考えられます。また、戦国時代とみられる鉄鏃は、新城市島田陣屋遺跡や清須市清洲城下町遺跡に出土例があります(10-4)。



10-5 火縄銃の弾 石座神社遺跡
(戦国/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)

弓矢から鉄砲へ

戦国時代に鉄砲が伝わると、飛び道具の主体は弓矢から鉄砲へと移り、戦いや軍のあり方を大きく変えました。鉄砲の役割が注目されたのが、1575年に新城市で起こった長篠の戦いです。新城市石座神社遺跡、同島田陣屋遺跡では、火縄銃の弾とみられる直径11~12mmの鉛玉が出土しています(10-5)。弓矢から鉄砲への歴史を物語る歴史資料の一つです。

民族資料の弓矢 ~パプアニューギニア



11-1 弓 パプアニューギニア民族資料
(現代/南山大学人類学博物館蔵)



ゆはず部の拡大

1964年に南山大学の東ニューギニア(パプアニューギニア)調査団によって収集された民族資料の弓矢です。20世紀前半まで実際に使用されていたものですが、考古資料では断片的にしかみることができない、弓、矢を総合的に知ることはできません。弓は先端のゆはず部が加工され、竹の樹皮とみられる弦がかけられています。矢の先端には、木、竹、鉄などのヤジリ(鏃)が用いられています。矢とヤジリをつなぐソケット状の部分には、彫刻など細かな装飾を施したものもあります。また、収集資料には、矢を入れる矢筒もあります。これらパプアニューギニアの民族資料は、考古資料を考えるうえでも、貴重な情報を提供してくれます。



11-2 矢とヤジリ パプアニューギニア民族資料
上2点: 竹製、下2点: 鉄製
(現代/南山大学人類学博物館蔵)



11-3 矢と矢筒 パプアニューギニア民族資料
(現代/南山大学人類学博物館蔵)